和歌山
地域面3ページ

和歌山支局
〒640-8154 和歌山市六番丁5
和歌山第一生命ビル4階
TEL073(431)1411
FAX073(433)0650
wakayama@mainichi.co.jp

【通信機関】
橋本 0736(32)0063 新宮 0735(28)1751
海南 073(482)0675 御坊 0738(22)2511
湯浅 0737(62)2870 田辺 0739(26)1026
【広告問い合わせ】 073(423)9291
【購読問い合わせ】 0120-468012

星の占い マーク・矢崎 23日

熊野古道 みちくさ記 21

日高川 最後の筏師

絵と文・熱田親憙 題字・熱田秦華

国道424号に沿って熊野三山に向かう途中、日高川に椿山ダムがある。そのダム湖畔に筏流し記念碑が建てられており、筏師の存在を知った。日高町在住の文士・杉村邦雄さんの計らいで、最後の筏師と言われている石本幸也さん(83)のお話を、日高川交流センター（同町高津尾）の一室でうかがう機会を得た。

佐井の鳴滝（日高川町高津尾）

石本さんは16歳の時、日高川上流の龍神・小又川の筏師の師匠に弟子入り。1948（昭和23）年のことだった。そこで3年間の見習いが始まった。

早朝から弁当を持って筏を組む集材所・鉄砲堰に行き、火をたいて先輩を待つ。編筏の見習いで杉、ヒノキなどの木材を組み合わせ、長さ約4㍍、幅約2㍍の組を15組つくる。これを連結して長さ約60㍍とし、その上に乗木を約30本載せて1枚となる。先頭の組に梶棒を付けて出来上がり。3人がかりで1日かかる仕事量だ。1年半たってやっと、筏の乗り方を筏師に習う。筏に3人で乗り1年の修行を積む。修得が早ければ、1年で親方からひとり乗りの許可が出る。その夜は祝いの酒宴となり、その際「いよー、いよー、えー、今日はうれしや鼻のり祝い よーい、よーい」の節で知られる日高川筏流し唄が歌われる。石本さんが町おこしのイベントで歌った流し唄を傍らのスクリーンで再現してもらった。辛かった冬の寒さや、初めて一人前になったうれしさが思い出されてか、艶のあるお顔に、一粒の涙が走っていた。

自然愛し、唄い続ける

一人前の筏師となったものの、その仕事は大水害のあった53（昭和28）年、21歳の時に3年間で終わった。当時の筏の流れは龍神～柳瀬（筏宿泊）～船津（船頭交代）～御坊の行程を丸2日間で遂行するというから、今のトラック便に負けない効率のよい輸送手段である。

当時の筏師を少年時代にみていた70代の男性は、「男らしくて恰好よく、憧れの的だった。当時ハイカラな帽子をかぶり、しゃれた装身具を付けた姿は、女性にもてていた」と述懐しておられた。

筏の流し方は、岸壁、岩礁に当てないように捌くことがポイント。御坊までに「五瀧」と呼ばれた難所があり、中でも「佐井の鳴滝」は最大の難所であったという。お話の後、その場所を見にいくと、あちらこちらにごつごつした岩場があり、通り抜けるのに命がけの仕事であったことが、想像できた。

大水害で筏師の仕事がなくなり、山出し、植林、下草刈りなど、県有林の山の保全に傾注してこられた。それだけに荒れ放題の現在の山林を見て「一日も早く間伐をして木元に日が当たるようにしなければならない」と感じる。また、ある粋人は日高川の美味な鮎を育む岩場のコケの現状を気にしておられた。石本さんは現在「筏流し唄保存会」に属して歌手として筏流しの唄を歌っておられる。後世の人が木を愛し、必ず森を生き返らせてくれると信じ、唄い続けているとのことだ。

子々孫々まで自然豊かな木の国・和歌山を保つために、県民一人一人が、自分に出来る自然づくりを始めてほしい。県あげて、自然の保護に努めなければならないと強く感じた。

さらし巻き梶切る筏
五瀧過ぐ 秦華

（次回は8月27日掲載予定）